

アメリカ人が瞬時にわかるアメリカボスとの付き合い方

By ユキーナ・富塚・サントス

**アメリカ人が瞬時にわかる
アメリカボスとの付き合い方
ユキーナ・富塚・サントス**

1	アメリカの病気とは何か？	2
2	12人の怒れる男 アメリカを象徴するカルチャー	3
3	アメリカ人の花道とは？	4
4	理想のボス	6
4.1	瞬間風速最大の理論.....	6
4.2	不動産とは？	8
4.3	人を見る目とは？.....	10
4.4	有能ということ.....	13
4.5	白楽は常にはあらず.....	15
4.6	愛される理由.....	19

1 アメリカの病気とは何か？

アメリカにしていると病的だなあと思うことが多い。肥満の人が多いのもショックの一つである。自分自身も、ジャンクフードに気をつけているとはいえ、ストレス解消とばかりに食べすぎ、体重が増えた。

それでも食に気を使っているのと、排毒が進んでいるので、胸、腰まわり、全体的にサイズアップである。

何度か書いたが、アメリカという国にはある先入観を持っていた。ワスプ（White Anglo-Saxon Protestant）の影響が強い、一神教のカルチャーを現した国というイメージである。

しかしここに来てみると自分の先入観が間違っていたということに気がついた。

また話がそれるが、だから百聞は一見にしかず、自分の目で確かめることは大切なのである。物事を判断するとき、みたことが無いものを憶測で決め付けるのは危険であるし、逆に、一目見れば、大体のことはわかるものである。

人間に関しても同じ、人を判断するときには、会って、話して、文章を取り交わす、

この3つから下した判断は概ね狂うことが無い。

話を戻すと、アメリカという国は、私が思っていたより、ダイヴァース、民族が多様になっていた。端的に言うとなんかアメリカを象徴するものである。

民族が多様になると、当然ながら、文化、カルチャーが多様になる。カルチャーとは宗教も含む価値観を凝縮したものであるため、多くの価値が入り乱れることになる。

ある事象について、ある民族は好ましいといい、別の民族は忌み嫌う。例えば、前にも言ったが、教会はカソリックを中心とする文化にあつては生活の中心である、そこから街が発展するといつても過言ではない。しかし、現代日本を見ると、マンションの隣にお寺やお墓が見えるのは、好ましくない。忌み嫌われる要因であるだけでなく、経済価値すら下げるのである。

2 12人の怒れる男 アメリカを象徴するカルチャー

さて、相反する価値が入り混じる前提を想定する。個々人が思い思いのことを言っているのは、社会は成り立たない。ある事象について集団の意思を決めなければいけない。そういうときにどうするか？である。

答えは簡単、多数決である。これが一番判りやすく、短時間で決着がつく。

これが、アメリカというものを象徴するカルチャーである。

もう少し説明すると、国によって、社会の熟成の程度、経済背景、宗教観が全く違うのである。お互いの状況を100%理解することは不可能である。ましてや一神教はその教義上チュウトハンパなものを定義できないのである。

そうなる最も受け入れやすいものが共通の認識として定着していく。少数よりも多数が言いとえばそれに従うようになり、複雑よりも簡単、単純なものが好まれる。だれにもわかりやすいからである。当然質よりも量が重視される。

前回の面接の例で言えば、「ハーモニーを作り出す」という目に見えない価値関連的なものよりも、何人の部下をまとめ、売り上げを何パーセント伸ばし、何年勤めたかというほうが、はるかにわかりやすいのである。

これも民族多様性が進んだためである。

多数決の最たるものである陪審制はアメリカの代表的カルチャーであるが、これを批判する映画「12人の怒れる男」が同じアメリカで作られるということも、忘れちゃいけないアメリカの特徴なのである。

数量重視、クオンティティオリエンティドなので、訳のわからない価値からでてくる「権威」というものが無い。反体制的なものも自由に創ることができるのである、これまたわかりやすい、「もうかる」という指標にのっかっていけば・・・

さて、量にこだわるようになると、人間、忙しくなる。まず、何のために生きるか？ということから数量把握しなければいけない。レベルの差はあれ、お金をどれくらい儲けて、どういう生活を送るか、という数字で表せることに、目標を設けるようになる。

3 アメリカ人の花道とは？

人間の寿命が80年と限られるのであれば、これを細かく区切り、数値目標を設定し、最短で、最も多くのフリーキャッシュフローをもって、働かない引退生活を送った者が勝ちになる。

これが典型的なアメリカ人の花道ではないだろうか？

目標があり、デッドライン締め切りがある。典型的なアメリカのカルチャーの特徴である。何度もいうが数量が重視されるので、早く物事を着手し、仕上げなければいけ

アメリカ人が瞬時にわかるアメリカボスとの付き合い方

By ユキーナ・富塚・サントス

ない。なぜか？ぐずぐずして、不測の事態に会うというリスクを避けるためである。

ある宿題がある。締め切りは1週間後である。生徒Aは余裕をもって締め切りの2日前に出した。生徒Bは不幸にも締め切りの日、提出しようと教授のオフィスまでの階段を上っているとき、最後の一段を踏み外して、大怪我をしてしまった。当然締め切りには出せない。この場合、不測の事故でした、宿題を受け取ってくださいという言い訳は通用しない。仮に受け取ってくれたとしても、そのグレード（成績）は限りなくゼロに近いのである。レポートの内容は反映されない。

なぜか？

いちいち例外を認めていたらキリが無いからである。異なる文化、価値観が混ざる、一度例外を認めると、真面目に宿題をこなすより、例外を認めてもらう方にエネルギーをさく輩が増えるのである。（イタリア人がいい例である。）

さらに、マトモに宿題をだしたAからクレームがくる。自分はリスクに備えていた、不注意があり、リスクに備えなかったBをなぜ同じ土俵で評価するのか？という不満である。これはきわめて判りやすく、このクレームを挙げられたらグウの音もでない。

これが一つのカルチャーに属する国なら話は別である。そこで培われた「やり方」というものがあり、これに従うことごとに、誰も何も異存は無い。

しかし、世界中に、民族がこれ以上多様化している国はない、といえるほど多様になっているのがアメリカである。単純で判りやすく、受け入れやすい最低ラインが共通のルールになっているのである。

宿題は早くやらなかった者が圧倒的に悪いのである。

数字という目標自体が、ルールになっている国、極論をいえば、目標自体が人生になっている。人生の大部分を目標のために費やすことになる。時間は重要な概念になり、